



勝手が違いすぎ
最初に赴任した時は島の人の

晴れて空気が澄み渡った日には、海に向こうの本土はもちろんのこと、東に淡路島、西に小豆島が見える家島。姫路市から南西へ約十八キロ、播磨灘の中央に浮かぶ瀬戸内の島に、私の勤務する家島診療所があります。家島は水不足の島として知られ、数十年前まで、「水と医師を確保できれば町長になれる」といわれていました。私は自治医大卒業後、一九九二年から四年まで家島で勤務し、九七年に再び家島に戻り、かれこれ十年以上、この島でお世話になっています。

たばた 田畑 まさひこ 雅彦 13期生、1990年卒



瀬戸内海の播磨灘に浮かぶ家島の港

医師として育てられ感謝

言葉の播州弁が聞き慣れず、けんか腰で話しているように聞こえたのでしたが、見ず知らずの土地に来たことがつらく、島流

んでもない島に来たなあ」というのが実感でした。

診療所の医者はころころ変わるので信用がないのか、島の人

は自分の体は自分で守るという意識が強いのか、「レントゲンを撮ってほしい」とか「点滴をしてほしい」、または「こんな薬が欲しい」、または「今日は調子がいいから点滴ではなく注射をしてほしい」などと、自分で検査や治療方針を決め、診療所に来る人までいました。

検査や治療方針を理解してもらえなかったり、翌日の診察でも大丈夫だと思える場合や、診療所に来られそうな場合でも時

間外診療や往診を希望され、それまで自分が思い描いていた医療は全くできませんでした。

人情忘れられず

しかし、そんな私が家島に戻

ってきたのは、島の人の人情が忘れられなかったからです。診療所の魅力は、地域の住人と同じ視線で生活できることだと思います。島の行事や学校行事の体験を、診療所に来る人たちと共有できます。島内を歩けば、子どもも大人も声を掛けてくれます。

そして、診療所で何とかやっているうちに家島への愛着も出てきて、島の人のために頑張ろう、役に立とうと思うようになっていました。そうすることが自分にとってもうれしく、やりがいにもなったのです。一方、島の人も診療所は自分たちの病院なんだと、もり立ててくれました。私自身、医師として育てていただいているのだと、感謝の気持ちでいっぱいです。

診療所に長く勤務すること、多くのことが見えてきました。最近では診療所の勤務医が減っているようですが、若い時代にこそ思い切った地域に飛び込んでほしいし、私自身もそうしてよかったと思っています。

(次回予定は宮城県)